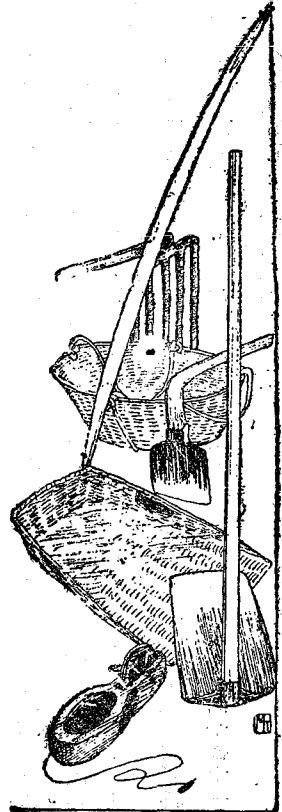


# 史料

## 東海道行脚 (二)

田中好



道路の現状やら其の昔を尋ねて行く私の旅は、行脚細見記に物語る積りで、本誌一月號から書き出したが、私の持つてゐる職務が近時増加した爲に、夫れは餘りに望みが多過ぎることゝ爲つた、日本橋を旅立つてから一年近くになるのに、まだ箱根にまで筆をとることが出来ないやうな次第である。そこで一と先東海道だけに限ることにして標題を改めた。

旅人の行く方々に踏み分けて

道あまたある武藏野の原

ちよつと數へ切れない位に澤山ある道路の、起點や終點となる道路の元標元標といふものは徳川幕府が、日本橋に

與へた役目から、世の中に出たもので、その慣例が、明治の御代になつても尊重され、大正になつては法定されたのだ、そして今では動かすことの出来ない國道の元標となつたのだ。

今の役人のうちに。五人や十人物好きな人が出て来て、この元標を江戸橋に変更しやうとしても、百二十有餘年の歴史が許さない、日本橋の靈よ、それに安心して、益々その職能を發揮するがよい。

京橋やら新橋は、今でこそ都大路の名橋として威張つてゐるが、慶長八年に、將軍家康が、諸侯に夫役して、今の駿河臺、昔の神田山の土で海を埋めたところに架けたのだだから家康のおかげで出来た橋だ。

この京橋と、新橋||昔の芝口橋||と、長祿年間に宇田川和泉守が架けたといふ宇田川橋と、それから金杉橋と、などにもさぞ澤山な昔物語があらう、それらの昔からの榮枯盛衰を語つて見たいが、その邊に引つかゝつてゐると東海道旅物語も何年かゝるか判らない、それはいづれ他の機會

に譲らう。

○ 東京の道路は、江戸時分から、悪るので有名だ「見しは今、江戸の道、兩少し降りぬれば泥深うして往來安からず、さる程に足駄の齒の高きを人皆好み、猩々は酒履きを好み、江戸の人は沼履を好む」と慶長見聞集は笑つてゐる、慶長から今まで、随分長い間の泥深道だ、もういゝ加減にいゝ道になつてもいゝ頃だ。

木が水に浮くのは當然だから、木塊舗装が水に浮き上つても道理至極と云つて置かう||が併し、電車の真ん中やらの側では、電車の敷石が浮き上つてゐる、電氣局では自動車を通るからだと云つてゐるが、土木局では施工が悪るいからだと云つてゐる、一體どつちがほんとだ、どつちにも理屈があるわけかな。

○ 日本橋の通りが。十間幅にまで擴がつたのは明暦の大火

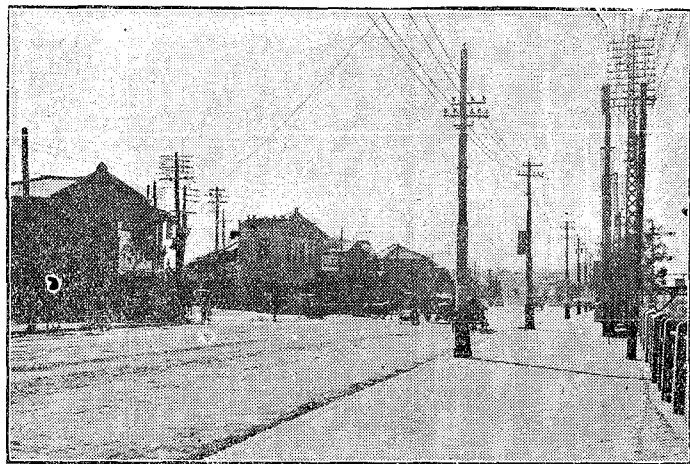
のおかげだ、明治になつて、市區改正事業が初まると、そ

昔の品川は、恰度今の東京驛、明治時代の新橋驛と、同

れをまた擴けたが、それでもまだ道幅は狭い、遞信省や電燈會社の電柱が、乃公の道路ぢやと云はんばかりに頑張つてゐる。自動車は、荷馬車の後からついてゆく、自動車は、自動車より一足先きに失敬する、と云つた調子ぢや、國道としての價値が疑はれる。

大正の震災復舊事業でも、此事には氣がついたと見え、京濱國道改良の完成と相俟つて、芝口から品川までの道路の擴張を目論んだそれが一日も早く完成するのを希望して、江戸の分の筆を擱かう。

## 品川



取扱はれてゐるが、昔は主客顛倒だ、こつちの方が都會地

### 現在の品川

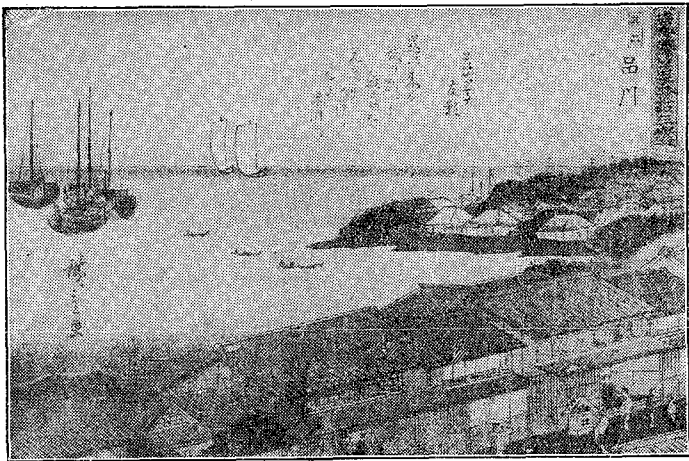
じ役目を勤めたところだ、西の方へ旅さるもの、西の方から来るものが必らず通らねばならないところであり、その送迎をするところであつた江戸元標からの行程二里、徳川氏が江戸に入府した後、慶長六年正月東海道巡見の時に、その品川を、東海道の驛次と定めたものである、井上通女の歸家日記を見ると、自分で送つて来てくれた人や、代理の人を寄來して送つてくれた人に、禮を云つて歸したことが書いてあり、壬戌騷旅漫録には、僕をこゝから歸したことが記されてある。

今でこそ、帝都の附屬地のやうに

だつたものだ、太田道灌が長祿年間に住んでゐたところは  
 御殿山であつて、こゝで夢のお告  
 げをうけ江戸城を築いたものだ  
 と云はれてゐる、道灌の後にも、宇  
 田川和泉守長清が御殿山に居を占  
 め宇田川橋などを架けてゐる、さ  
 うして見ると、品川は、江戸東  
 京の都市計畫策源地と云つても悪  
 るくはない。

近頃の都市計畫は、いつも會議  
 ばかりの都市計畫で、圖面に線を  
 引くだけの都市計畫だが、昔のは  
 手つ取り早かつた、直ぐ實行し完  
 成した、道灌の築城は四日だ、家  
 康の如きも、二年足らずの間に、  
 江戸城をこしらへ、江戸市街の大  
 改修をやつた、斯うした古人の努力に對しては、敬意を表

さなくつてはなるまい。政治生活の過渡期である今日此頃



往 昔 の 品 川

は、會議制度、集智制度が適策であ  
 るとしても、會議ばかりで議論倒れ  
 に終つてゐては、古人に對しても耻  
 しからう。

狭苦しい芝口邊の悪路に惱んだ者  
 が、海の面の豊潤さを嬉しく感ずる  
 のは八ツ山邊だ、岡部日記を讀むと  
 その邊の感じがよくうつされてゐる  
 歸家日記の主人公も、江戸から二里  
 の旅路に疲れて、こゝに休憩し、海  
 の彼方を眺め『雲につらなりたる海  
 原、むかふざまに高く見えて、けに  
 末の松山をもこえつべし、浪の立ち  
 歸るなぞ面白く、こゝに住む人ぞ羨  
 ましき』と羨望してゐる。

櫻の名所として有名だつた御殿山に、櫻の植えられたの

から一杯酒屋に小料理屋である、海には、砲臺跡が物淋し

は徳川八代將軍の時だ、その櫻は

けに浮んでゐる。

吉野から持つて來たものだ、御殿

○

山の名の起つたのは、こゝに秀元

此間、完成した京濱新國道は、昔

が殿宇をこしらへたからだが、そ

からの品川の宿驛を棄て、その町

れは將軍から、品川は景色の面白

の北裏に路線を採り十二間幅のもの

いところだ、殿宇を建て、日夜遊

にした、舊道の三間足らずの幅に比

覽の地とせよと云はれたからだ。

べると四倍の擴張だ。

だが、その御殿山も、今のやう

この棄てられた舊道は、路幅こそ

な小規模のものぢやなかつた。嘉

三間足らずだが、拵らへた時には、

永六年に、品川沖に、砲臺を築い

随分大きな犠牲を拂つたものだ、徳

た、その時、御殿山の土を採つて

川日記によると、慶長十四年己酉九

築造したから、御殿山は今のやう

月、關東衆に道路の普請を命ぜられ

な小丘になつて仕舞つたのだ。

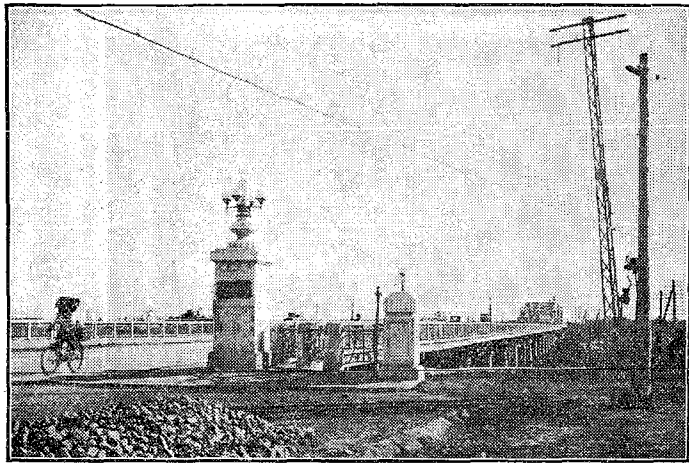
轟川より江戸への間、路次潮入つて

○ 品川の町は、何となく廢墟とい

道悪かりければ、上の野山を三十尋

ふ感じがする、昔の面影を傳へてゐるのは女郎屋と。それ

普請者迷惑に及びしが十月末に出來畢る、とあるから、難



工事であつたに相違無い、川品川驛附近から八つ山橋までの間は、今も猶ほ難路だ。

處で、舊道の棄てられたことによつて、息を吹き返してゐるものは、徳川時代からの、往年の人の慰安機關だつた宿場女郎である、東京府が心得てゐる粹に捌けたわけぢやあるまいが、新國道にならなかつたばかりに、宿場女郎は保存されたのだ。

さて、新國道は折角出来上つたが、幅を十二間にして、路面を舗装して、立派なものになつたが、八つ山のところで、京濱電車と、市電とが新國道を斜に切つて敷かれてあつて、自動車や通行人が大きな電車の九十九折を眺めて停立してゐるやうぢや困るこ

れぢや、新國道の價値も、餘り認められない。

## 大森

品川から大森へ行く途中には、

恐ろしや罪ある人の首だまに

つけた名なれ鈴が森とは

と彌次さんの詠んだ鈴が森がある、

慶安四年に徳川幕府が設けた刑場の

址だ、八百屋お七や平井權八が、生

恥死恥をさらしたところ、今は新舊

の東海道に狹まれて、物淋しげに昔

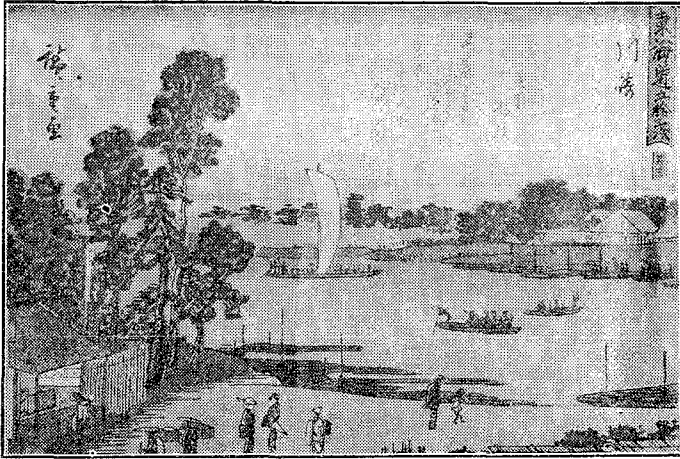
を物語る石碑が建つてゐる。

元明十八年、道興准後の廻國雜誌

では、

蘆まじりおふるあらるの

打ちなびき、波に



往昔の川崎

むせべる岸のまつかぜ

と詠んだり、萬年集でも

草かけのあらるの崎の笠島を

見つゝも君が山路越ゆらむ

と詠んだりしてゐるところから見ると新井即ち今の大森は、今のやうな情景ではなかつたに違ひない鎌倉時代の東路は、品川から大井町の北方を廻つて、池上本門寺の處に出で、矢口の渡にと出てゐたのらしい。

處が、今ぢや、大森の町はまるで、東京の人の變な遊び場所となつてゐる様で、此處にも彼處にも砂風呂の看板ばかりが目につく、こゝばかりは風俗警察も何もあつたものぢやない、〓街道筋が、山の手から海岸へと移つたゝめに、斯うした情景を描き出す



やうになつたものでもあらうか。

### 六 郷

鎌倉時代の東路は、六郷の方へはやつて來てゐない、延文十二年新田義貞が鎌倉の執權畠山道誓の詐計に陥つて横死した矢口の渡、あれが東路の正道で、前に書いた池上から、矢口の渡へと通じてゐたんだ。

平安紀行を見ると、文明十二年に太田道灌が上落したがその折、河崎といふところで、朝ほらけかすみうながす河崎に、浪を見るまで立てる白鷺、といふ歌を詠んだとしてある、して見ると、この頃はもう六郷の渡を正路としてゐたやうだ、が、いつ

さう變つたか、その邊は判然しない。

六郷神社々司元能尚宣氏の六郷橋今昔史といふのを見る

風土記稿によると、寛文二年と天和三年とに改修したこ

と、「小田原記に、永祿九年武田信玄當國亂入の際、六郷に行方彈正居たりしが、己が屋敷の近所なる八幡を要害に構へ、六郷の橋を燒墜しと書いてあることが記してある。して見ると、假橋のやうな粗末な橋が架けてあつたものと見える。

橋らしい橋の出来上つたのは、慶長六年徳川家康が、關ヶ原を發して江戸に入つた時に架けたもので、長さ百十一間幅四間二尺、欄干には雄大な擬寶珠を刻し、六郷の新大橋といふ名をつけた。

これを、先づ六郷橋の起源と云つてよい。



往昔の神奈川

とが記してある、貞享五年の七月二十一日には稀有の大出水に遭遇して折角の名橋も流失して仕舞つた、そこでまた昔のやうに渡船にした、尤も、渡船といふことにはなつてゐるが、毎年九月から翌年三月までは假橋を架け、出水時だけを渡船にして置いたのだ。

明治六年に、六郷八幡塚の人鈴木左内が、官許を得て、こゝに賃取橋を架設し同三十四年まで通行人から賃錢を取つてゐた、その後東京府と神奈川縣の經營に移したが、大正になつて、京濱國道の改修につれ、六郷橋も、タイドアーチ型構二連と、

六十呎の鐵桁十七連の、二百四十間四分幅九間といふ混凝



土橋に改造された。

六郷橋を渡ると、京濱電車の大師線が、國道の下を潜つて敷設されてゐる、電車の線路と道路とは斯ういふ風になるべきものだ、穴守線も、早く、斯う改まるがよい。

處で、時代に逆行してゐるのは、鶴見附近の海岸電車だ、海岸電車が平面に交叉してゐることだ、近頃になつて、こんなやり方を許す當局の無自覺には驚き入るの他は無い、おかげで自動車はいつも立往生、何といふ馬鹿けたことだらう。

夫婦橋からこつち、随分長い間、新國道は舊道を顧りみやうともしなかつたが、生麥では、舊道を利用してゐる、新舊國道の合併するところに、碑石がある、これは文久二年に起つた生麥事件の記念物だ、碑文に曰く、

英國人力查遜殞命于生麥村。因爲之。歌曰。君流血兮此海壖。我邦變進亦其源。強藩起兮王室振。耳月新兮唱民權。擾々生死疇知聞。萬國有史君名傳。我今作歌勸貞

我。君其含笑于九原。

英人リチャードソンの殺された時は、尊王攘夷の盛んな時だ、そしてリチャードソンは、薩摩の島津久光の行列を横切つたから殺されたのだ。

### 神奈川

神奈川は、明治三十四年に、横濱の市域に編入されて仕舞つた、だから今の神奈川は、獨立した神奈川ぢやない。が、元來、神奈川が本家であつて、横濱が分家なんだ、<sup>ヂシ</sup>出店なんだ、本家が出店に併呑されて仕舞つたわけだ。

神奈宿内青木町は、神奈川湊と呼ばれてゐたが、その頃は、横濱よりも、船舶の出入が多かつたさうだ。

神奈川宿が開かれたのはいつからだか、はつきり判らない、武藏風土記稿によると、鶴ヶ岡八幡宮所藏の文永三年文書、に神奈川驛のことが記してあるとあるから随分古いものだ。徳川幕府の鎖國政策が破れて、安政六年五月から神奈川を開港する條約を締結したが、神奈川が東海道の要

路に當つてゐて、大名や武士の來往が頻繁であるのに、こゝを開港することは、内外人の衝突を惹起する憂がある、と云つても外人のために、東海道の宿驛を變更するのも國威に關するといふので、横濱を、神奈川の一部のやうなことにして變更した、それが、今に神奈川が横濱に吸収される因となつたのだ。

彌次さん喜多さんは、この神奈川の景色に惚れ込んだり茶屋の女にからかつたりしてゐる。けれど今の神奈川は、昔の海を埋め立て、彌次さんを満足させる景色が無くなつて仕舞つてゐる。

大正の大震災に、横濱の方は、灰燼に化した、が、神奈川は幾分助かつた、これは港を横濱に奪はれたおかけかも知れない、世の中は萬事賽翁の鹿と馬だ。

往來は京濱國道改築のために十三間幅に擴げられた。

一寸斷つて置く!! これまで書いて來た東海道は、ずっと昔の東海道ぢやない、彌次さん喜多さん時代の東海道だ、

武藏國そのものが寶龜二年十月までは東山道に屬してゐたので之が以前の東海道は、相模國東參驛、今の三浦郡から海路東京灣口に出で、それから下總に出でゐる。

鎌倉時代の東海道は、勿論、鎌倉中心主義だから、京都鎌倉間であつたことはいふまでもない。

そしてその頃江戸鎌倉間の公道は、神奈川から金澤を経て鎌倉へ出たもので、今の三十一號國道と府縣道藤澤鎌倉線とが、それに相當する、が、筆者は、彌次さん喜多さんに倣ひ、また歸家日記の女主人通女や東海道驛路の鈴の著者の足跡をたづねて、神奈川からは程ヶ谷、戸塚に出でゆくことにする。

おい、神奈川よ、昔を證議してみると、今威張つてゐる横濱よりは手前共が家系がよいのぢや、浦島太郎が龍宮から歸つて親の墓を尋ねて此處までやつてきた程、手前共は景色の良い港だつた、榮枯盛衰は世の習ひぢや、夢のやうな京濱運河でも出來たら昔の地位を占めるのは請合だ、マ―夢の實現を待つがよい。(未完)